

[ブーケ]

bouquet



日本めぐり

本連載では、日本各地で文化や芸術を支えている方々取材します。

第8回は岐阜市、和傘職人の河合幹子さんに
実際の作業工程を見せていただきながら、お話を伺いました。

第8回 岐阜県岐阜市

河合幹子 和傘職人



河合幹子（かわい・みきこ）

和傘職人、今日和（かさびより）代表。岐阜市の和傘問屋の家系に生まれ、幼い頃から和傘の製作を身近に見て育つ。27歳のときに和傘製作を始め、現在は蛇の目傘、番傘、日傘、小蛇の目などの製作を行っている。2016年7月にオリジナルブランド「今日和」を立ち上げる。2018年5月から「長良川てしごと町家CASA」内の「和傘CASA」で主に販売している。

【販売や在庫のお問い合わせ】
和傘CASA

住所：岐阜県岐阜市湊町29
電話：090-8335-9759
営業時間：11時00分～18時00分
定休日：火、水
<https://www.teshigoto.casa/>

河合幹子さんのブランド

「今日和」の詳細は

こちらからご覧ください。



<http://kasabiyori.com>

今回訪れた岐阜県岐阜市は、織田信長ゆかりの岐阜城や

市内中心部を流れる長良川などがある、歴史と自然に恵まれた魅力的な場所です。

この地では伝統工芸の文化も育まれており、提灯や和傘、のぼり鯉やうちわなどがあります。

その中でも和傘は、国内生産量の3分の2を岐阜市周辺の職人たちが製作しています。

和傘問屋の家系に生まれて

— どのようなことがきっかけで、和傘職人を目指そうと思われたのですか？

河合：母方の実家が和傘問屋でしたので、和傘は身近な存在でした。和傘を製作する祖母に憧れて、幼い頃は和傘職人になりたいと思っていました。けれど大学まで進学したので、一般企業に就職しました。27歳のときに和傘職人の叔父から人手が足りないから手伝ってくれないかと声を掛けられたことが、この道へ進んだきっかけです。

— 専門的な世界へ飛び込むことに迷いはありません

でしたか？

河合：ありませんでした。なじみのある仕事でしたし、叔父が働いているところを幼い頃から見ていましたので、すぐに決断しました。

— 製作をしてみて、大変だと感じたことはありますか？

河合：昔から職人さんの手つきを見ていたのですが、皆さん簡単に作業されるんです。以前は大量生産が主流でしたし、すごい手さばきですものだから、そこまで難しいものだとは思っていませんでした。でも実際にやってみたらこんなに難しいことをとんでもないスピードでこなしていたのだと気がきました。最初は苦労しましたよ。



竹で作られた傘骨を水平に開く

— 通常の和傘製作は分業制と聞きました。

河合：はい。最初に勤めていた叔父の和傘の製作会社も分業制でしたが、誰かが病気になると作業は止まりますし、ご高齢の職人の後を継ぐ人がいないなど、和傘に携わってすぐに「1人でひととおり作れるようにしておかないと後々すごく困る」と感じました。ですので、独立してからしばらくは1人で製作していました。今はスタッフが1人増えたので、正確には1人で作っているわけではありませんけれど。1人での製作は品質のコントロールがしっかりできるなど、よい面があります。

— 製作の技術はどなたから教わったのですか？

河合：最初は叔父からでした。あとは職人さんです。叔父の会社を辞めてからは、引退されたベテランの職人さんに聞きに行っておぼろげなことが多かったですね。ただし引退されていますので、見て学ぶのではなく、聞いて自分でやってみて、また聞きに行く、という形で作っていました。

お客様にとっては唯一の傘

— 和傘の材料は、どこで手に入れるのですか？

河合：重要な部品である「骨」と「ろくろ」は岐阜の職人さんから仕入れています。「ろくろ」に用いるエゴノキは、毎年美濃市の瓢ヶ岳で伐採します。以前は伐採してくださる木こりさんがいたのですが、お亡く

なりになり手に入らなくなってしまったので、毎年和傘関係者が伐採して材料を集めているんです。

— 表面の和紙の部分には、やはり岐阜の美濃和紙を使うのですか？

河合：いろいろですね、産地によって得意不得意がありますから。美濃和紙はたいへん丈夫でしなやかですが、色物はあまり漉かれません。色物が欲しいときには、色物が得意な産地の和紙を使いますし、美濃和紙に限らず全国からさまざまなものを仕入れています。今張っている和紙は阿波紙といって、徳島の藍染の和紙です。昔、祖母が藍染の日傘を作っていましたので、それを再現したくて自分で仕入れて取り入れています。

— 製作中は和傘がとても大きく感じられますが、完成して閉じると小さく見えますね。

河合：今は水平に和紙を張っていますからね。持つ段階になると勾配が付くので小ぶりになります。日傘はさらに雨傘よりも小ぶりです。雨傘のサイズは、着物を着た人が腕を伸ばして袖がぬれない大きさと言われています。諸説あるみたいですが。

— 雨傘は和紙に特殊なコーティングなどをするのですか？

河合：張ったあとに油を塗ります。油には乾く油と乾かない油の2種類ありますが、乾く油のアマニやエゴマ、桐油をブレンドして使います。そのあと天日干しをします。

— 製作の中で、緊張される工程はありますか？

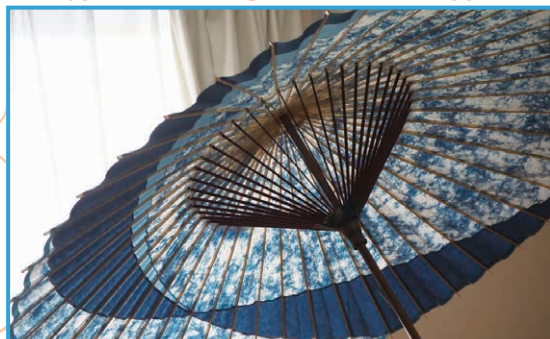
河合：油を塗ったあとの、最後の仕上げの塗装です。それによって、ここまで上手に製作できていた和傘がだいなしになってしまうことがあります。好きな作業であると同時に、緊張する工程です。

— 河合さんは月に何本ぐらい和傘を作られるのですか？ また1本あたりの期間はどのぐらいかかるのでしょうか？

河合：スタッフが増えたので、今は月に20本、多いと



和紙を張り付ける



藍染の和紙を用いた和傘

きは30本作っています。製作期間については10本ぐらいロットでまとめて生産するので、はっきりしたことは答えられないのですが、日傘は部品の組み立てから完成させるまで1か月半かかります。雨傘だとさらに天日干しするので2か月ぐらいでしょうか。

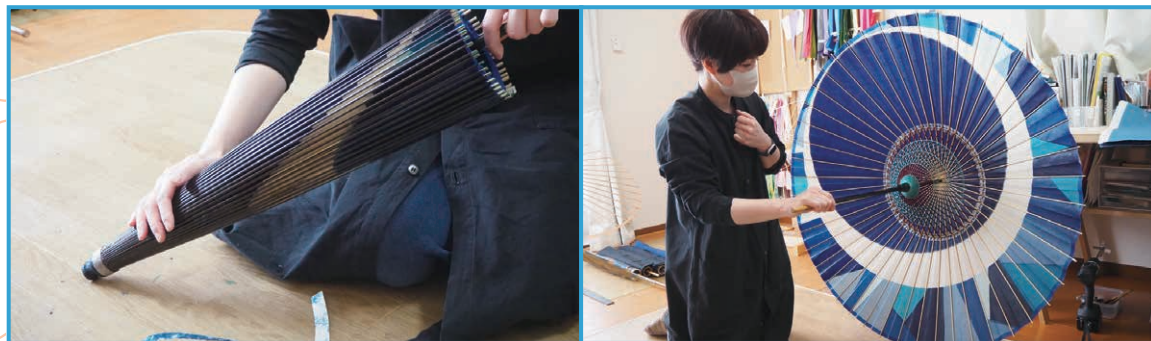
— 和傘は注文されてから製作するのですか？

河合：誰でも購入できるよう店頭で並ぶものと、お客様が色や柄を指定してオーダーしてくださったものの両方を作っています。半々ぐらいですね。毎月たくさん製作していますが、お客様にとっては唯一の傘であることを忘れないように心掛けています。

長持ちでお手入れは簡単

— 和傘は通常何年ぐらい使えるのでしょうか？

河合：使い方にもよります。私は独立して6年たちますが、独立直後の傘を使われている方もいらっしゃるのですが、6～7年は使えると思います。私の作ったものではありませんが、10年以上同じ和傘を使っている方もいますし。一方で2～3年でだめになってしまう場合もあり、使い方を伺うと、ずっと閉じたままにされてしまったということです。閉じたままだと、傘の表面の油と油がくっついて破れてしまいます。あるいは撮影などで雨傘を紫外線の下でずっと使っていると、酸化が進んで紙がパサパサになり破れやすくなります。使い方しだいです。



河合さんが製作した和傘

— 雨傘の使用後はどのようなお手入れが必要ですか？ すぐに拭いて乾かすとか……。

河合：いいえ、拭かなくていいんです。玄関先にちょっと半開きにして1晩置いておき、乾いたら閉じるだけでかまいません。

— 洋傘と同じで、簡単なんですね。

河合：日傘は和紙のままなので特にお手入れもなく、破れなければずっと使えます。それこそ祖母が製作した30年前の日傘はいまだに使えますし。定期的に開いておけば、長持ちします。和傘には風通しが大切です。

— 和傘を購入するお客様は、どのような方が多いのでしょうか？

河合：6割ぐらいは日本人の男性で、ふだん使いされるそうです。外国の観光客が日本の工芸品を購入すると思われる方も多くみたいですが、お客様のほとんどが日本人のようです。あとは撮影用で注文を受けることも多いですね。

— 河合さんは和傘製作のワークショップも開いているということですが、どのような参加者が多いですか？

河合：女性が多いように感じます。今来てくれている女性スタッフも、ワークショップの参加者でした。とても筋がよくて「手伝いにきてほしいぐらいです」と言ったら、後日「やってみたいです」と連絡がありました。それから3、4年たちました。

— すてきなご縁ですね。河合さんは、どのようなとき和傘製作にやりがいを感じますか？

河合：お客様が購入してくださったり、その傘をさしている姿を見せていただいたりしたときです。お客様とはふだん接する機会はありませんが、販売して下さるお店の方は、売れたり注文が入ったりすると、「河合さんの傘をこういう方が買ってくれました」などと必ず伝えてくださるので、そのことを聞くとほんとうに励みになります。



和傘の内側には46本の骨がある。全ての工程が手作業で進められる

岐阜和傘を地場産業に

— 日本の和傘の3分の2が、岐阜県で作られているそうですね。

河合：正確な数の統計は取れていませんが、和傘の部品「ろくろ」の出荷数から割り出しています。今は岐阜の生産数が減り、他産地の生産数が伸びているので、負けられないようにしたいですね。

— 和傘文化は、江戸時代頃から続くとのことですが。

河合：その頃の藩主が武士の内職で和傘作りを奨励したことが、和傘の地場産業のきっかけになりました。長良川から美濃和紙や竹などの素材が長良川流域で取れたことも理由です。和傘以外にも提灯や水うちわなど、竹と和紙を使った工芸品が岐阜市では有名になりました。昨年、岐阜和傘は経済産業省から「伝統的工芸品」に指定されました。

— 岐阜和傘がますます発展されることと思います。今後の抱負をお聞かせいただけますか？

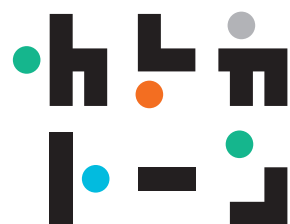
河合：和傘製作に携わってみて、この技術はとだえてしまうと再現は非常に難しいことが分かりました。おそらくとえたらなくなってしまう文化だと思います。

す。実を言うとは私は「伝統的工芸品」という呼び方があまり好きではありません。ほんとうは岐阜和傘を地場産業として、しっかり地域に根付いたものにしたいと思っているんです。そのために以前税理士事務所で働いていた経験を生かして、和傘に携わる人たちが生活していけるような、お金の回る産業にしたいと考えています。和傘の認知度は上がってきていますが、岐阜が日本一の和傘の産地であることはまだまだあまり知られていません。和傘をより多くの方に使っていただくために、岐阜和傘の裾野を広げたいと考えています。そのためには、和傘を作れる人を少しずつ増やしていくことにも力を入れていきたいと思っています。

— 最後に若い方にメッセージをいただけますか？

河合：和傘を見たり触ったりした経験のない方が多いと思います。ですから、もし和傘をどこかで見かけたら気にしていただきたいのです。和傘の魅力は、雨の当たったときに鳴る、水が和紙をたたき音だと思っています。これはさしてみないと分からないのですが、洋傘とは異なるすてきな音が聞けますので、ぜひその違いを楽しんでいただきたいと思っています。

Information



「カトカトーン」とは

「カトカトーン」は、主に小学校3年生以上を対象とした、教育現場で活用できる音楽Webアプリケーションです。初心者でも分かりやすく音楽作成ができる機能を備え、プログラミング的思考の育成につながる体験ができます。また、つくった音楽を書き出して、学習支援ソフトウェア等を通じて共有することができます。

さらに、教育芸術社発行の音楽教科書に掲載されている楽曲（一部）がプロジェクトファイルとして配布され、視覚的に分かりやすくカトカトーンのピアノロール画面に表示されることで、楽しく感覚的に楽曲の構造を分解・分析して理解することができます。

Webブラウザを通じて誰でも無料で全ての機能を利用することができるため、GIGAスクール構想で整備された1人1台のタブレット端末環境で活用でき、個別最適化された新たな音楽の学びを実現します。

※「カトカトーン」は、音符の俗称である「おたまじゃくし」の古語「蝌蚪（かと）」をモチーフにした造語です。

「カトカトーン」について、詳しくはウェブサイトをご覧ください。

<https://www.kyogei.co.jp/katokatone/>



音楽を作成する画面のイメージ。
初心者でも操作しやすい。

教育芸術社ウェブサイト

～『音楽教育 ヴァン』『bouquet [ブーケ]』
掲載のご案内～

教育芸術社で発行している本誌『bouquet [ブーケ]』と姉妹誌『音楽教育 ヴァン』は、ウェブサイトでもご覧いただけます。

2023年に創刊20周年を迎えた『音楽教育ヴァン』は、音楽科の先生方に役立つ内容を豊富に掲載しています。両誌ともに動画や記事の関連情報など、限定のコンテンツもご紹介していますので、ぜひご覧ください。

音楽教育 ヴァン

https://www.kyogei.co.jp/data_room/vent/

bouquet [ブーケ]

https://www.kyogei.co.jp/data_room/bouquet/

教育芸術社LINE公式アカウント

LINE公式アカウント(@kyogei)では、最新号掲載の情報をいち早くお届けしています。

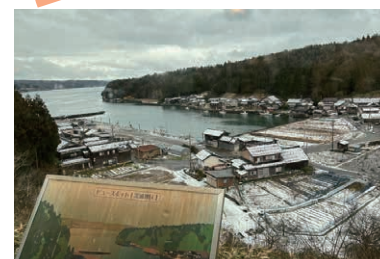


上野耕平の

© I r o s s i n g [クロッシング]

第16回

のと里山里海号



石川県能登半島を走る、のと鉄道七尾線。列車から眺められる景色は、正に日本の原風景。四季折々の大変美しい海や里山を望むことができます。

中でも土日祝日に運行される観光列車「のと里山里海号」では、ビュースポットで一時停車してくれるサービスも！事前予約すれば地元の食材を使用した寿司御膳やスイーツセットもいただけます。これが本当に美味しい!! デイゼル列車のサウンドをBGMに、美しい車窓と絶品グルメ。正に五感で楽しむ鉄道の旅です。

ちなみに下り列車の終着駅である穴水駅には、なんと跨線橋に牡蠣小屋が！これもまた、他では味わえない美味です。

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第1位・特別大賞（史上最年少）。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「×(かける)クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「情熱大陸」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

◇上野耕平コンサート情報はこちら。

<https://uenokohei.com/concert/>
(上野耕平公式サイトより)



編集部メモ

のと鉄道の運行する「のと里山里海号」は、能登半島の内浦を走る全席指定予約制（空席があれば当日乗車可）の観光列車。

沿線案内は専任のアテンダントが務めており、「七尾駅」～「穴水駅」間の約1時間、世界農業遺産に認定された能登の里山里海の風景を楽しむことができる。





田嶋 勉（たじま・つとむ）
柏市立柏高等学校非常勤講師・同吹奏楽部顧問
東葛学生吹奏楽団 LEGALIS 外部顧問 / 柏市立土中学校学校運営協議会 会長
前 柏市立増尾西小学校 校長 / 元 千葉県音楽教育研究会 副会長（合奏部長）

本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第13回は、柏市立増尾西小学校の前校長であり、作曲家・吹奏楽指導者として長年尽力してこられた田嶋勉先生が、コロナ禍の全校朝会で語った講話です。自分の歩幅で一步一步、諦めずに歩みを進めていくことの大切さを子どもたちに伝えています。また今号では、田嶋先生が教育現場で大切になさってきたことや、ご自身の作曲活動、そして今後の展望についてもお話を伺いました。

第13回 田嶋 勉 先生（柏市立増尾西小学校 第14代校長）

一步一步

千葉県佐倉市出身で読売巨人軍終身名誉監督の長嶋茂雄さんが文化勲章を受章したと、先頃報道されました。長嶋さんは以前に国民栄誉賞も受賞されており、誰もが認める国民的ヒーローで、千葉県民として誇りに思います。そして、皆が誇りに思う千葉県の偉人をもう一人思い出しました。その人は地図を作ったことで有名な人です。延享2（1745）年に千葉県の九十九里に生まれ、後に佐原で商人として財を築き、隠居後は天文学者・測量家として歴史に名を遺す仕事をした人です。誰のことだか分かりましたか？ 正解は伊能忠敬です。忠敬は50歳で江戸に出て星学（現在の天文学）を学び、55歳から71歳までに日本全国を測量して歩き、極めて精度の高い日本地図を書き上げました。その完成度は当時世界でもトップクラスだったそうです。

……九百一、九百二、九百三、九百四、九百五、九百六、忠敬はここで立ち止まってしまいました。前回歩いたときはこの永代橋は九百四歩で渡り切ったのに、今日はそれよりも二歩多い。「これじゃだめだ、歩くたびに違うようではいけない。踏み出す一步が何度やっても同じ歩幅にならないと測量には使えない。全国を測量するのに機械はもちろん使うけれど、歩測、要するに歩いて測ることもできないと、機械だけでは段差のある道などで誤差が多く生じてしまうので正確な地図を作ることができない」こんなふうに自分に言って聞かせ、日々、歩測訓練を怠らなかつたようです。

廊下の端から端まで何歩あるか、そして毎回同じ歩数で歩けるか。なかなか難しいですね。ところがそれを訓練と努力でできるようにして、定規のように正確に自分の足で距離を測れるようにしたのが忠敬。天才という言葉で片づけければ早いのですが、やはりこの人は想像をはるかに超える努力家でもあったのだと思います。

四千万歩だそうです。地図を作るために日本中を歩いた歩数。彼の生きた時代は江戸時代。もちろん人工衛星も飛行機もドローンも、車も自転車もナビも、その頃にはありませんでした。アナログな測量機械と自らの足とで日本中の海岸線をくまなく歩いて測りきった人。一步、二歩、三歩…と歩みを繰り返せば、諦めずに続ければ、休み休み休憩しながらでも進んでいけば、気が付くと自分でも驚くほどのことを成し遂げられるのだと思います。

私のかつての教え子に、トランペットとサックスのユニットを組んで演奏活動をしている人たちがいます。ユニット名は「Passo a Passo」、イタリア語で“一步一步”という意味です。英語でいうところの“Step by Step”。焦ることなく一步一步、休みながらもよい、一步一步、歩みを進めなさい、との思いを込めて命名しました。プロデビューから5年がたち、今では立派な演奏家になりました。

駆け足は長く続かない。大股で歩みを進めてもすぐに疲れがやってくる。自分の歩幅で歩み続ければ、知らないうちに大きくて確かな力が付いているはず。“継続は力なり”です。

（令和3年11月 全校朝会にて）



ピアノを演奏する田嶋先生。コロナ禍で歌う活動にも制限があったため、講話とともに先生自らピアノを弾いて聴かせ、子どもたちが音楽に触れる機会を失わないよう工夫されていた

田嶋先生は現在、柏市立柏高等学校で非常勤講師と吹奏楽部顧問を務めながら、ご自身のライフワークである作曲活動を続けられています。作曲においては、全日本吹奏楽コンクールの課題曲となった『WISH for wind orchestra』『エアーズ』『ピッコロマーチ』『汐風のマーチ』をはじめ、柏市市制施行50周年を記念した『かしわハッピー』などのご当地ソングも手掛けてられました。多くの人々に愛される名曲を生み出してこられた田嶋先生の、教育への思いや作曲に対するお考え、そして現在の活動についてお話を伺いました。



インタビュー風景。柏市立柏高等学校の音楽準備室にて

bouquet【ブーケ】編集部（以下、b）: 田嶋先生は中学校や高等学校で長年教えてこられ、校長として小学校に赴任されました。子どもたちに接するときには、どのようなことを大切になさっていましたか？

田嶋: 小学生の吸収力はすごいですよね。まだ何も癖が付いていない分、言ったことがすぐに染み込むし、学校で経験することの影響が大きいと感じました。だから、講話にしても一つ一つ大切にしなければいけないと思いながら話していました。小学生は隅から隅まで理解していなくても、どこか一部分でも興味を引くところがあれば反応してくれるんです。例えば講話の中でシューマンの曲を紹介したとき、小学生にはちょっと難しかったかなと思ったのですが、2年生の男の子が「僕、シューマンすごく好きなんです」と話し掛けてくれたことがありました。それ以降、小さい子どもだからと先入観をもたずに講話を考えるようになりました。

b: コロナ禍に校長を務められていましたが、大変だったことや工夫されていたことはありますか？

田嶋: もともと歌うことが大好きな子どもたちでしたが、コロナ禍で「歌ってはいけない、リコーダーも吹いてはいけない」と身動きが取れなくなってしまって……。せめて子どもたちに生の音楽に触れてもらえたらと思い、講話とともにピアノを弾いて聴かせることもしていました。卒業式でも校長の話は手短に切り上げないといけなかったので、式辞とともにピアノ演奏を贈りました。

b: 教員をされながら作曲活動も続けてこられました。特に2004年の全日本吹奏楽コンクールでは、田嶋先生が作曲された課題曲『エアーズ』を、ご自身の指揮で柏中学校吹奏楽部が演奏したことも印象に残っています。

田嶋: 学校現場にしながら曲を書けたのは恵まれたことだったかもしれません。書いては音出し、書いては音出し、ですね。中学生の演奏は正直なので、吹きづらく書くと本当に吹きづらそうで鳴らない（笑）。書いたらすぐ音にすることができる環境だったのでたいへん勉強になりました。自分の作品を生徒たちに演奏してもらえることは教師冥利に尽きます。学校の仕事をがんばると曲づくりでもふんばれるという相乗効果も感じました。周りの先生方にも応援していただき、ありがたいことだったと思います。



吹奏楽の世界で長年活躍してこられた田嶋先生



還暦記念演奏会の様子。プロの演奏家として活躍する教え子たちが集まり、楽団を結成した

b: 先生が作曲を始められたきっかけは何だったのでしょうか？

田嶋: 高校1年生のときの音楽の授業で、島崎藤村の「初恋」という詩が配られて、これで歌をつくりなさいという課題が出されたんです。それで何とか見よう見まねで書いて弾き歌いをしたところ、予想外に皆が喜んでくれて。そこからですね、作曲に興味をもち始めたのは。名詩といわれるものは片っ端から読んで、歌曲や合唱曲にしていきました。教員になってからも、帰りの会で生徒たちに詩の暗唱をさせました。毎日2人ずつ前に出てきて暗唱し、皆は目を閉じながら聴く。こうした体験は大人になっても覚えているものなんですよね。そのときは訳が分からなくて丸暗記だったとしても、触れさせていくことが大事だと思っています。

b: 2022年10月には還暦記念演奏会が開かれ、かつての教え子の皆さんが大集合したとお聞きしました。

田嶋: 実は、この演奏会は教え子たちが「先生、演奏会やりましょうよ」と持ち掛けてきてくれたんです。講話にも登場した管楽器ユニット「Passo a Passo」*の2人です。企画からメンバー集め、司会まで全て彼らが仕切ってくれました。そうしたら、教え子たちをはじめプロの演奏家として活躍する面々がずらりと集まってくれて。中には、「母が先生の生徒でした」というメンバーもいました。お母さんが私の初任校での吹奏楽部の部員だったと。感慨深い巡り合わせでしたね。練習ではだんだん部活動のような雰囲気になってきて、懐かしい光景がよみがえってきました。

b: 今までの作品の中で、特に思い入れがある曲はありますか？

田嶋: 実はご当地ソングもいろいろつくってまして。柏市の市制50周年記念には『かしわハッピー』という曲をつくりました。詩を募集して曲を付けて、市内の

小中学校で歌ってもらったのはよい思い出です。他にも、ある日突然、柏市の増尾という地域の町会長さんが我が家を訪れ、地元の音頭をつくってほしいと頼まれて『増尾音頭』という作品も書きました。初演は幼稚園の園庭で行われた盆踊り大会です。

b: 今後の展望をお聞かせください。

田嶋: 生涯に一度はピアノ協奏曲を書きたいと思っていましたが、還暦記念演奏会が企画され、この機会に発表できればと考えて作曲を進めました。そして書き上がったのが、吹奏楽とピアノのための『遠き花火』です。聴いている人を飽きさせちゃいけないという信念で、夏祭りの雰囲気を出すために花火が上がる様子を音楽で表現したり祭囃子を入れたり、曲の内容や構成を工夫しています。当初はピアニストに演奏を依頼するはずでしたが、周囲からの勧めもあり自分で弾くことになりました。いや、なってしまいました。いまだかつてこんなに練習したことはないぐらい練習しました（笑）。他には、2021年から「東葛学生吹奏楽団 LEGALIS（レガリス）」という、地域の学生（小学4年生から大学生まで）が所属する吹奏楽団の顧問をしています。学校の部活動が縮小傾向にある中で、受け皿として新しい形を模索していかなくてはと考えています。

* Passo a Passo (パッソ ア パッソ)

田嶋勉先生くらもちともあきの教え子である藏持智明（トランペット）と柏井拓野まついたくや（サクソ）によるユニット。ポップスやジャズ、クラシック、オリジナル曲など幅広い選曲で老若男女が楽しめるステージを企画。コンサートや各種イベントへの出演の他、学校の芸術鑑賞会にも積極的に赴いている。

<https://www.passoapasso-japan.com>



One day, ワンデー ワンモーメント one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

ヒダキトモコ

フォトグラファー。日本写真家協会 (JPS)、日本舞台写真家協会 (JSPS) 会員。
米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォト
を中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭の
オフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。
<https://hidaki.weebly.com> Instagram: tomokohidaki_1,2,3

18 枚目

一瞬の縁

アンコールワット。子どものころに抱いていたイメージは、
鬱蒼とした木々に覆われた、廃墟のように謎めいた場所。
大人になって訪れてみると、開けた土地に建つ、それ自体が
芸術品のような美しい建造物だった。明るい回廊には数々の、
時代と共に風化を経た仏像が並ぶ。静寂と、カラリとした氣の
よい場所といえは伝わるだろうか。

若い僧侶たちが、丁寧に壁の彫刻や仏像を見学している。柱
の陰から、まだ子どものお坊さんが嬉しそうに顔をだし、目が
合った。ほんの一瞬の出来事だが、その瞬間、懐かしいような温
かい空気が確かに流れ、次の瞬間にはもう、何事もなかったかの
ようにそれぞれの人生へ戻っていく。そんな出会いが、不思議と
心地よかった。



Contents

- 04 [連載] 日本めぐり 第8回 河合幹子(和傘職人)
- 08 [Information] 新たな音楽 Web アプリケーション「カトカトーン」試験公開中!
- 09 [連載] crossing 第16回 上野耕平
- 10 [連載] 次代につなぐ 校長先生の講話 第13回 田嶋 勉
- 14 [連載] フォトエッセイ One day, one moment 18 枚目 ヒダキトモコ

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.18をご清覧いただき、ありがとうございます。
今号の「日本めぐり」では、河合幹子さんに和傘製作の作業工程を見せていただきながら取材を行いました。河合さんが1本ずつ丁寧に製作した和傘は、開くと薄い色の部分からは光が柔らかに差し込みます。
大切な人にプレゼントしたくなるような、たいへん美しい傘に感動しました。
「次代につなぐ 校長先生の講話」は、田嶋勉先生(前 柏市立増尾西小学校校長)のお話です。作曲家としての顔をおもちの田嶋先生は、教員生活と並行して吹奏楽、歌曲、ご当地ソングなど、多岐にわたる作品を残されています。インタビューを通してこれからの音楽活動、そして教員としての思いを語っていただきました。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。

staff

Art Direction & Design(表紙・本文): 中澤美羽

DTP: 清新社 / 印刷: 新日本印刷

製本: ヤマナカ製本

No. 18

<https://www.kyogei.co.jp/>